

ハリウエルの「三匹の子豚」の文化史的読解（その1）

——AT124 話型の英仏類話との関連において——

藤 倉 恵 子

目 次

（その1）

1. はじめに
2. フランス民話とイギリス民話
 - a. 参照類話
 - i) フランス語圏類話
 - ii) 英語圏類話
 - b. ドラリュによる AT124 話型の物語要素分析
 - c. ハリウエル版の物語形態
 - d. 英仏類話の特徴
 - i) 家の破壊方法
 - ii) ハリエニシダとシダの示す場所：伝承童謡の世界の象徴
 - iii) 家を出る理由と教訓性
 - iv) 家の素材の選択と論理性

（その2）

3. モチーフ分析
 - a. ハリエニシダ
 - i) シダのある風景と「赤ずきん」
 - ii) ハリエニシダとイギリス文学
 - b. カブラ
 - i) 文学のなかのカブラと食文化のなかのカブラ
 - ii) ハロウィーンとバター攪拌器
 - iii) ハロウィーンとカブラ
 - iv) ハロウィーンとリンゴ
4. 農業革命と産業革命
 - a. カブラとイギリス農業革命
 - b. 農村共同体の崩壊：イギリス食文化の衰退
 - c. 「こども」を描いた19世紀文学：「悲惨さ」
5. おわりに

キーワード：ハリエニシダ，カブラ，リンゴ，バター攪拌器，悲惨さ

1. はじめに

「三匹の子豚」の話として、最も普及しているのは、1933年に制作された同名のディズニー・アニメの影響を受けたものかもしれない。三匹の子豚が、それぞれに異なる素材の家を造っている場面から始まる。やって来たオオカミは、藁と小枝の家を次々と吹き飛ばすが、煉瓦と石の家だけは破壊できないので、煙突から家に入ろうとしたものの、子豚の用意した熱湯のなかに落ち、やけどを負って退散するというものである。もっとも、絵本童話の世界において児童文学（創作童話）化が進む傾向は、「三匹の子豚」についても例外ではない。しかし、世界の民話の学術的分類に使用されている、アールネおよびトンプソンにより作成された『民話の話型』(*The types of the folktale*, 1961)¹⁾に拠れば、これは124番の話型(AT124)に属する口承話由来の物語なのである。

たしかに、絵本童話の類いのなかには「イギリス昔話」、あるいは、再話（伝承話を下敷きとして物語を書き留めることで、英語の〈retelling〉の訳語）者の名前としてであろうが「ジェイコブズ作」と付記されているものもある。ジョゼフ・ジェイコブズ (Joseph Jacobs, 1854–1916) は、オーストラリア生まれのイギリスの民俗学者で、『イギリス昔話集』(*English Fairy Tales*, 1890)に収めた「三匹の子豚 (“The story of the three little pigs”）」に準拠したものということになるだろう。ただし、ジェイコブズの「三匹の子豚」は、同じ19世紀ながら、彼よりも50年近くも前に、ジェームズ・オーチャード・ハリウェル＝フィリップス (James Orchard Halliwell-Phillipps, 1820–1889) というイギリスの童唄・昔話収集家が『イングランドの伝承童話』(*Nursery Rhymes Of England*, 1842)に収めた同名の物語のテキスト全文をそのまま引用したものに他ならない。そして、ジェイコブズも、ハリウェルも、「三匹の子豚」を収めた物語集のタイトルが、イギリスの伝承に由来することを明確に示していることには変わりがない。

しかし、フランスの民話学者ポール・ドラリュ (Paul Delarue, 1889–1956) は、フランス語圏で収集した民話のカタログと言うべき『フランスの民話—フランスの類話についての考察付きカタログ』(*Le Conte Populaire Français, Catalogue raisonné des versions de France*, 1976 et 1985, 1997)²⁾において、収集したAT124話型に分類される51類話の内容を精査した結果として、この話型の民話は、「文学作品として書き留められることがないままに」、つまり作家によって再話されることなく、「もっぱらフランスで口承話として愛されてきた」、「われわれの(フランスの)国境の外では、まれにしか広がりを見せなかった話」であると結論づけている。さらに、この話型の物語は、ハリウェルの再話「三匹の子豚」によって、まず英語圏に、そしてディズニー・アニメ化されたことで、世界的に普及することになったと述べている。

口承話のなかには、「シンデレラ」がその例だが、ルーツ的に、世界的規模の分布を示し、しかも、この分布状況の普遍性にふさわしいかのように、地域や時代にかかわらない、いわば、

人間における普遍的な問題が描き込まれているものもあるが、一方、この「三匹の子豚」の場合のように、比較的限定された地域で育まれてきた話には、なによりも、その母胎となった土地固有の文化と歴史が深く結びついているのではないだろうか。

ここでは、AT124 話型の世界的普及に大きな影響を与えたハリウエルの「三匹の子豚」を、19世紀イギリスの時代と文化を反映したものとして、AT124 話型の類話とともに読解を行いたい。すなわち、この話型の口承話の母胎となったフランス語圏の類話、および、イギリスでいち早く再話を行ったハリウエルを取り巻く（イギリスを中心とする）英語圏の類話との関連における分析である。

ハリウエルの「三匹の子豚」には、他のどの類話にも見られない特徴がある。物語冒頭、母豚が子豚たちを家から送り出すのは、食べさせてやれなくなったからだと言られる。また、ハリエニシダ、カブラなど、昔話には珍しい植物に野菜、そして、バター攪拌器（樽）といった道具が登場する。これらは、類話群のなかでは、どのように位置づけられ、ハリウエル版においては何を指し示しているのだろうか。この読解は、ハリウエルに登場するモチーフを手がかりとした英仏文化の比較考察にもなるだろう。

2. フランス民話とイギリス民話

a. 参照類話

i) フランス語圏類話

AT124 話型はフランスの口承話が母胎であるとドラリュが述べているのは、彼の『フランスの民話—フランスの類話についての考察付きカタログ』（以降、『フランスの民話』と呼ぶ）においてであるが、これは、フランス語圏に限定して収集された民話についての唯一のカタログである。話型ごとに分類し、各話型を構成する物語要素の分類にローマ数字、アルファベット、算用数字の順に下位区分となる記号を使用し、これによって、個々の類話の物語形態を表記している。さらに必要に応じて、特筆すべきあるいは例外的ディテールと思われるものは、文言で付記を行っている。したがって、すべての類話をテキストとして検討しなくても、このカタログによって、フランス語圏民話の特色を数値的に、ある程度、概観することができる。

『フランスの民話』に収集された民話は、いわゆる口承版（versions orales）が中心である。ドラリュのように作家ではなく民間伝承学者であったり、あるいは、民話収集家による再話で、聞き取りを行った話についてのソース、すなわち、語り手の氏名、生誕年、そして、誰からどこでその話を聞いたかなどが記録されたものである。もっとも、あきらかに作家による再話も含まれているが、それらは類話としてリストアップされていても、ドラリュによる分析対象からは除外されているようだ。AT124 話型の類話については、ドラリュ（1889–1956）とほぼ同時代の人で、民俗学者でもあるが、なにより作家であるアンリ・プーラ（Henri Pourrat, 1887–

1959)の『お話し宝物』(*Le trésor des Contes*, 1963)からの3話(v.49, 50, 51注:ドラリュが類話に付した番号)が、この類いである。

ところで、ソースの記載がなく、また、多分に創作的要素が含まれているような作家による再話であっても、現在では、これを、文学作品としてのみならず、民話として、民俗学的にも検討するべきであると捉えている。これは、皮肉にも、ドラリュが、この『フランスの民話』において、作家ペローの創作性を指摘して以降のことである。AT333話型のはじめての再話となるペローによる「赤ずきん」について、赤い頭巾というヒロインの属性となっている物語要素が、それまで思われていたように伝承由来のものではなく、ペローの創作であると明らかにしたのであった。作家の創作的要素について、これを作家が伝承の要素を理解したうえで、それをよりよく表現するための手法であり、そして、そこには、やはり、伝承の象徴体系に添ったもの、あるいは、再話された時代の文化の特色が反映していると考えられるからである。このことは、なんらソースの記載のないハリウェルについても、同様に評価できるものと考えたい。

さて、『フランスの民話』でAT124話型について収集された類話(version)は51番まで番号が打たれているので、各類話については、その番号で(v.1)のように表記する。51類話中、9話(v.3, 8, 21, 26, 44, 48, 49, 50, 51)については、テキストレベルでの検討も行うものとする。

なお、『フランスの民話』の冒頭に、このカタログに収集された類話の出典一覧の記載があるが、各類話の出版年度³⁾を確認したところ、なかには、不詳であったり、未発表であったのが20世紀になってドラリュが報告というかたちで発表したものなど、記録された時点が不明確なものもあるが、記録者の年代から確認しても、19世紀に再話された、あるいは、報告の形式で書き留められたものは、51話中、わずか、18話(v.3, 4, 5, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 21, 22, 23, 24, 42, 46, 47)で、一番古いものでも、詩人であり民話収集家であったアシル・ミリヤン(Achille Millien, 1838-1927)が1885年に記録したもの(v.10-16)である。

ii) 英語圏類話

今日、民話の話型分類番号の唯一の学術的カタログとなっている『民話の話型』は、類話の地方(国)別の分布状況も数で示している。これによれば、AT124話型の類話分布は、最も多いフランスにおいて47話で、次が、フランス系アメリカ地域(Franco-American)の11話となっている。たしかに、フランス語圏での類話の多さが突出している。

一方、イギリスの類話としては1話のみで、〈English 1〉と表記され、〈Jacobs *English*〉とも表記されているので、ジェイコブズの『イギリス昔話集』⁴⁾所収の「三匹の子豚」をさしている。これは、すでに述べたように、ハリウェルの『イングランドの伝承童謡』⁵⁾所収の「三匹の子豚」とまったく同じテキスト文であるが、冒頭に、「むかし、むかし、豚が詩をくちずさんでいた頃」で始まる四行詩を独自に加えている。

ところで、「三匹の子豚」を含む『イングランドの伝承童謡』は、〈private edition〉つまり

私家版である。会員を500名に限定し、出版を目的とした協会、パーシー協会（Percy Society, 1840–1852）から出たもので、ハリウェルも1840年の創立メンバーのひとりである。第2版はテキストの修正や増補を加えて1843年に〈John Russell Smith, Soho Square〉から、第3版は1844年、第4版は再び内容を増補し、テキストの配列を変え、そしてイラストを載せて1846年である。以降、内容変更はなく、第5版を1853年、第6版を1860年に出している。以降は、彼の他のテキストとの合本出版で、現在、出版されているのは、1870年の合本版からのリプリントである。

ハリウェルの『イングランドの伝承童謡』は、1951年、イギリスの民俗学者オーピー夫妻による『オックスフォード伝承童謡事典』（Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 1951）が出るまでは、1世紀にわたって、童謡集の編纂にあたって準拠すべき唯一のテキスト集として貢献したと位置づけられている。

ここで、注目されるのは、ハリウェルが、第5版（1853）に寄せた「序文」（Preface to the Fifth Edition）である。これが彼の唯一の序文となるもので、彼の出版の意図を述べた重要なものと思われる、リプリント版も掲載している。また、プロジェクト・グーテンベルク（PG/ebooks）が、ハリウェルの『イングランドの伝承童謡』の保存対象を第5版としているのも、決定版以降で、かつ序文が載った版だからであろう。この「序文」も、「三匹の子豚」のテキストとともに、検討の対象とする。

なお、英語圏には、ドラリュがフランス語圏の民話を対象に行ったような、英語圏の民話のカタログはない。ただ、元ピッツバーグ大学教授で2000年以降、南ユタ大学在職の、民間伝承研究者アシュリマン教授（D. L. Ashliman）は、ウェブ上に神話、伝説、インド＝ヨーロッパ語族の民話などについて収集したテキストを公開しており、AT124話型については、類話を9話⁶⁾ 収集されているのを参照できる。このうち1話はジェイコブズ版（1890）だが、ハリウェルは含まれていない。また、イタリア民話が1話含まれている。そこで、ハリウェル以降の再話ではあるが、ジェイコブズが参照しえた、ジェイコブズより古い再話3話と、ディズニー・アニメが下敷きとしたことで有名なラング版（1892）を参照するものとする。

このうち、もっとも古い再話となるのが、作者不詳『イギリスの森と木』（*English Forests and Forest Trees*, 1853）所収「キツネとピクシー」⁷⁾である。便宜上、「キツネとピクシー」と名付けるが、物語名はついていないし、物語毎に独立したスペースもとっていない。「ダートムアにまつわる話である」（Another singular story is told on Dartmoor.）の文で始まる。ダートムアは、イングランド南西部に広がる、イングランド特有のムア（moor）と呼ばれる荒れ地の原野である。そこでピクシー（pixie）たちが集落（colony）を形成しているところを、キツネが襲うのである。このピクシーの祖先は、サクソン人の侵入前には、イングランド南部に住んでいたピクト人とされるところから、小柄で荒れ地に住んでいたとされる伝承の存在である⁸⁾。

次に古い出版年度が、ヴィクトリア女王の時代の作家であり、子供の本の編集にも携わった

ジョゼフ・クンダル (1818–1895) が、収集し、編集した伝承の童謡や物語を集めた『若い人たちのための娯楽本の宝庫』(*A Treasury of Pleasure Books for Young People*, 1856) 所収の「キツネとガチョウたち」(“The Fox and the Geese”)⁹⁾である。

アフリカン・アメリカンの「黒人伝承」(negro tale)として、『リップピンコット・マガジン』(Lippincott’s Magazine of Popular Litterature and Science, Volume 20, December, 1877) 所収の「子豚くん」(“Tiny Pig” by William Owen)を取り上げる。これは、ジェイコブズが『イギリス昔話集』の巻末で唯一、英語圏の類話として挙げているものでもあり、PG版¹⁰⁾で読むことができる。

ディズニー・アニメ映画『三匹の子豚』の下敷きとして、ドラリュは、ハリウエルを挙げているが、別の見解もある。ウォルト・ディズニーについてノン・フィクションを書くにあたり、ディズニー家からすべての資料の閲覧を許されたというジャーナリストであり映画研究者でもあるニール・ゲイブラーが挙げている¹¹⁾のがアンドリュー・ラングの『緑の本』(*The Green Fairy Book*, 1893) 所収「三匹の子豚」(“The Three Little Pigs”)¹²⁾である。

以上の6話を、英語圏の類話として参照する。以上について、簡単に、ハリウエル版、ジェイコブズ版、ピクシー版、クンダル版、黒人伝承、ラング版と呼ぶことにする。

b. ドラリュによる AT124 話型の物語要素分析

ドラリュが『フランスの民話』において、AT124 話型についておこなっている話型の物語要素分析を確認しておこう。これを参照することで、フランス語圏類話と対比的に、ハリウエル版の特徴が、そして、英語圏類話の特色も浮かび上がると思われる。

ドラリュによる AT124 話型分析¹³⁾

AT124 「オオカミと小さな家の3匹の動物たち」

(Le Loup et les trois Animaux dans les Petites Maisons)

I. 動物たちの集合と出発 (Rassemblement et départ)

A. 動物は三(まれに二)匹の同種か異種の家畜

1. 雌のガチョウあるいは雄のガチョウ (oie(s)/jars)
2. 雌のアヒルあるいは雄のアヒル (cane/canard)
3. 雌鳥 (poule)
4. 雄鳥 (coq)
5. 雄豚か雌豚 (cochon/truie)
6. 山羊 (chèvre)
7. 色で区別(白・黒・赤)

8. 年齢や体格で区別（この場合、もっとも年下で最も小柄なものが主役となる）
9. 最後の者が「毛の抜けたもの」(la pelée)
10. 動物（たち）には子供たちがいるか、のちにもうけることになる

B. 動物たちは農家を離れる決心をする

1. かれらの飼い主が祝祭の食事に彼らを屠殺しようとするので
2. かれらの飼い主が彼等を市で売ろうとするので
3. 冒険あるいは旅に出かけるために
4. 動物たちの一匹が聞いていて、次々と他の動物に知らせる
5. オオカミが三匹の家畜と一緒に出発しないかと誘う
6. とりわけ森に逃げ込む

II. ちいさな家の建造と家への攻撃（Construction et attaque des maisonnettes）

- A (1) 家畜たちは家を別々に建てる。3番目の動物の家が、その動物固有の特性によって、あるいは、よりすぐれた援助を得て、もっとも堅固である
- A (2) 家畜たちは一つの家を建て、そのなかでオオカミから身を守ろうとする
1. 最初の二匹が次々と、疲れたという
 2. 最初の二匹が、一緒に建てた小さな家を次々とうまく我が物としてしまい、三匹目は一人取り残される
 3. 3番目の動物が荷車から必要な素材を落としてしまう
 4. 3番目の動物が職人の援助にあずかる
 5. 産んだ玉子と引き替えに
 6. 3番目の動物が聖母マリアの助けにあずかる
 7. 最初のふたつの家は軽い素材である
 8. その素材は動物性有機物(organique animale)
 9. その素材は植物性
 10. (3番目の)家は(石、板、金属などの)強固な素材
 11. (家は)釘やピン(clous /épingles)がそそり立っている
- B (1) オオカミは次々と最初の2つの家を破壊する（あるいは、次々と家の中に入る）ことに成功する（一連の行動が反復される）
- B (2) オオカミは、一般に、3番目の家に難儀する
1. オオカミは（体を温めたい、体をかわかすなど）中に入るための口実をもちだす
 2. 家畜は同意してオオカミを入れてやる
 3. 家畜はオオカミを入れることを断る

4. オオカミは家を打ち破ったり、家の上にあがって家を踏み抜いたり、ひっかいたりして、家を壊す
5. オオカミは、生理的機能 (*fonctions naturelles*) にうったえて、家を壊す
6. 2匹の家畜は、むさぼり食われる
7. 1匹目の家畜は2匹目の家に、それから2匹目が3匹目の家へと、2匹は次々に逃げることに成功する
8. オオカミは3匹目の家の釘の突き出たドア (*la porte hérissée*) にぶつかってひどく怪我をする
9. オオカミは (3番目の家の) ドアの間隙にお尻を近づけるよう言われ、赤く焼けた鉄を突っ込まれる
10. オオカミは、体の違う部分を入れてくれるように頼み、その都度、ひどく挟まれる
11. オオカミは、煙突を降りてくるように言われ (あるいは自ら降りて)、焼け死ぬか湯だってしまう

III. 追加のベテン策 (AT136 話型に該当部分) (*Duperies supplémentaires: T136*)

- A. オオカミは家畜を食べようと家から家畜をおびき出すために、あるいは、家畜はオオカミから逃れるためにオオカミをだまそうとして、一緒に果物類 (あるいは野菜類) を収穫にいこうと提案する
- B (1) 家畜は約束の時刻より前にそこに行き、したがって、オオカミが到着したときには、安全に帰途についており、オオカミを馬鹿にできるのである
- B (2) 家畜はオオカミの方に向かって、果物を遠くに投げて、その間に家に逃げ帰ることができる
- B (3) 家畜はオオカミに、果物に見せかけてまったく違ったものを投げつけ、痛い目にあわせる
 1. 家畜は石を投げつける (これがオオカミの歯を割る)
 2. 家畜は (オオカミの目つぶしになる) 灰か、あるいは燃えた石炭を投げつける
 3. その他
- C. (上記のAの) オオカミ、あるいは (上記のAの) 家畜が、一緒に市に出かけようと誘う
- D. 家畜は約束の時刻より先に出かけ、帰途、オオカミがやってくるのを見ると、買ったモノ (容器) のなかに隠れる。オオカミは、そのなかにいるとは怪しまず、したがって、家畜は後でこのことでオオカミを馬鹿にすることができる
 1. オオカミは鹽 (*baquet*) の上で休憩する
 2. オオカミはその上に放尿する
 3. オオカミはそのモノを祈祷室 (*oratoire*) と思い、そこでお祈りをする

4. オオカミは動物が（なかで）ひっくり返ることで盥がたてる音に驚き、逃げてしまう
- E (1) 家畜は家のなかにはいつてきたオオカミと対決する
- E (2) 家畜はゆでてしまうよう立ち回るか、あるいは、沸騰した湯（あるいはその他）を用意している
1. 家畜は（パンをこねる、洗濯をするなど）家事に励んでいて、オオカミにそれに参加するようにすすめる
 2. 家畜はオオカミに、（狩人たちの）犬たちが近づいてくると告げて、〔パン生地の〕練り桶（pétrin）に隠れるように言う
 3. 家畜は、オオカミに息抜きのためだとの口実で、それに穴をあける
- E' (1) 家畜はオオカミを罵る決まり文句（formulette）を言う
- E' (2) オオカミは家畜を罵る決まり文句を言う
- F'. 敵対者の質問にたいして、取るに足らない返事がかえってくる。
- (1) オオカミは熱湯でやけどする
- F (2) 牧羊犬は毛のぬけたオオカミを警戒する（警句）
1. オオカミに犬が放尿していると思わせる

IV. A. 家畜たちは農家に戻ることにする

c. ハリウエル版の物語形態

以上の物語要素に付された記号にしたがってハリウエルの再話「三匹の子豚」を表記すると以下ようになる。この記号表記にそって、ストーリーをたどっておく。

- I. A. 5. B. 該当項目なし（困窮のため家から送り出される）
- II. A (1) 7, 9（植物性素材ハリエニシダ）, 10. B (1) (2) 3, 5, 6, 11.
- III. A. B (1) (2) C. D. 4 E (2) E' (2) F'. (1)

ハリウエルの「三匹の子豚」に登場するのは、同種複数動物（母豚と3匹の子豚たち）とオオカミ、それに子豚たちが家の素材をもらい受ける通りがかった人間である。三匹の子豚たち（I. A. 5.）きょうだいが出家する理由（I. B. 該当項目なし）は、もう食べるものがなくなったから世間で幸せを見つけておいでと、母豚に家から送りだされたからである。3匹はそれぞれに家を作る（II. A (1)）。最初に家を出た子豚は藁（straw/II. A 9.）で、2番目は「ハリエニシダ」（furze/II. A 9.）で家を作るが、間もなくやってきたオオカミが戸を叩き、入れてくれるように言う（II. B (1)）のにたいして子豚が断る（II. B (1) 3.），という一連のやりとりの末に、狼は家を吹き飛ばして（II. B (1) 5.），子豚を2匹とも次々に食べてしまう（II. B (1) 6.）。しかし、3

番目の子豚の煉瓦 (bricks/II. A (1) 10.) の家を吹き飛ばせないことがわかった狼は (II. B (2)), 子豚を家からおびき出そうと、「カブラ」(turnip) の収穫 (III. A.) に誘うが, 子豚は狼との約束より先に出かけて収穫を済ませて帰宅する (III. B (1)). 「リンゴ」の収穫 (III. A.) に誘われても, 子豚は, やはり約束より先に出かけるが, 収穫の途中でオオカミを見つけるとリンゴを遠くに投げて, 相手が拾う間に逃げ帰る (III. B (2)). オオカミは子豚を市に誘うが (III. C.), やはり約束の時間より先に出かける。「バター攪拌器」(butter-churn) の買い物をすませるが, オオカミを見つけると, そのなかに隠れて丘を転がり, オオカミを怖がらせて (III. D. 4.), 無事帰宅する。あとで, これを子豚から聞かされたオオカミは絶対食ってやると宣言し (III. E' (2)), 煙突から入ろうとするが (II. B (2) 11.), 子豚は鍋に湯を湧かして待機し (III. E (2)), 狼が落ちてきたところで蓋をすると, 狼をゆでて, 夕御飯 (supper) に食べてしまった。

このハリウエルの物語について, ドラリュが網羅した物語要素に欠けているもの, 要素のパリエーションのなかにないかきわめて少なく, 特異なものについて考察する。

d. 英仏類話の特徴

i) 家の破壊方法

ハリウエルでは, オオカミは家を「吹き飛ばす」ことで破壊する。ちなみに『民話の話型』では, AT124 話型を代表する物語名は「家をふきとばす」(Blowing the House In) で, ハリウエル版で, オオカミが子豚たちに言う決まり文句に由来する。

Then I'll huff, and I'll puff, and I'll **blow your house in**.

それじゃあ, は一っとして, ぷ一っとして, おまえの**家を吹き飛ばすぞ**。

一方, ドラリュが, この話型を代表する物語名として与えたのは, 「オオカミと小さな家の3匹の動物たち」である。また, 家の破壊方法の, 「吹き飛ばす (blow out the house in)」は, ドラリュの挙げた物語要素に語句としては表現されていないが, ハリウエル版の分析においては, (II. B (1) 5.) の「生理的機能に訴えて家をこわす」のパリエーションとみなした。ただし, フランス民話においては, これは, 息で破壊するのではなく, 生理的現象, すなわち, 放屁なのである。アリエージュ地方の民話として収集された, ソースの明確な話, 「メンドリと(雄の)アヒルと(雌の)ガチョウ (“La poule, le canard et l’oie”)(v. 44)¹⁴⁾」を見てみよう。農業に以前, 従事していた71才のアリエージュの村の女性が, 同じく同地で生まれた父親から聞いた話として1953年に語ったのを, シャルル・ジュワスタンが再話したものである。

Pête fort et loufe fort,

Ma cabanette tient fort! (太字変換は筆者による)

強く屁ってみろ，強く屁ってみろ。

私のおうちは丈夫なんだぞ

先に引用したハリウエル版では、「吹く」の意味をもつ異なる動詞〈huff/puff〉で語の韻律を整えていたが，このアリエージュ民話でも「放屁する」の意味をもつ異なる動詞〈pête/loufe〉を同じ効果のためにくりかえしている。

英語圏類話を参照すると，吹き飛ばすという家の破壊方法は，黒人伝承においてのみ見られる。ピクシー版は「ひっかく」，ラング版も「ひっかいて穴をあける」方法である。クンダル版では，ガチョウの家の屋根が不備のため，屋根をはがしたり，屋根の藁に火を放ち，ガチョウが飛び上がってくるのを待ったりと，複雑である。

上に引用したアリエージュ民話（v.44）は，ソースが明確で，口承版というべきものである。AT124 話型の類話での「吹き飛ばす」ことによる家の破壊方法は，口承版におけるスカトロジックな面が洗練化されたものであろう。ただ，韻を踏む楽しさは，いずれも，独自の言語で残されたことになる。

ii) ハリエニシダとシダの示す場所：伝承童謡の世界の象徴

ここで，家の破壊方法と「ハリエニシダ」(furze) との関係を考えてみよう。ハリウエル版では，2 番目の子豚の家の素材となるが，この植物はどの類話にも登場しないし，また，昔話には珍しいモチーフである。英語圏類話のうち，場所が地名で特定されているのは，ピクシー版のダートムア伝承のみである。ダートムアは，現在，イギリスの国立公園で，そのホームページを見ると，ハリエニシダも生えているようだ。

一方，フランス語圏類話については，動物たちが家を建てる場所は，ドラリュの物語要素にあるように，家の素材が木の葉や枝であるのにふさわしく，「森」〈I. B. 6.〉が多い。フランス語圏類話 51 話中 12 話（v.1, 8, 9, 11, 15, 23, 26, 34, 45, 48, 50, 51）を占める。ちなみに，上に引用のアリエージュ民話（v.44）では，動物たちは，山頂 (montagne) をめざして旅をする。

では，ハリウエル版の子豚たちは，どこに向かったのだろうか。ハリウエル版において，ハリエニシダを場を特定するものとして考えてみよう。1 番目の子豚の家の素材の「藁」(straw) と 3 番目の子豚の家の「レンガ」(bricks) は，単独でも，一対の組み合わせでも，かならずしも，特定の場所を示しえない。しかし，2 番目の子豚のハリエニシダは，かならず，荒地と結びつく植物である。イギリスの人にとっては，それこそ，ダートムアのようなイメージすらわくかもしれない。そのような土地柄，つまりは，風が吹きすさぶ荒地では，襲う側の動物が吹き飛ばすという方法に訴えるというのが，家の攻撃法として連想しやすいものであろう。

ところで，ハリウエル版には，「家」とか，「野原」など，限定された空間を表す言葉がそもそも欠けている。子豚たちは，「自分たちで幸運を見つけておいでと母豚に送り出された」(she

sent them out to seek their fortune) が、「家」を出たとか、「世間」に出たとさえ、言うてはいない。子豚たちが家を建てた場所だけでなく、どこから来てどこに向かったのか、具体的場所をあらわす普通名詞が、物語の前半、物語要素の〈I〉、〈II〉に該当する部分には皆無である。ところが、〈III〉の「追加のベテン策」にあたる部分、すなわち、3匹目のレンガの家の子豚がオオカミの策略にのりながら、うまくオオカミをだましては逃れるというくだりになると、うってかわって、「スミスさんの菜園」(Mr. Smith's Home-field)、「陽気園」(Merry-garden)そして、「シャंकリンの市」(fair at Shanklin)と、架空の固有名詞から実在の地名まで登場することになるのである。

しかし、物語前半については、「ハリエニシダ」の存在だけが、風の吹く原野だけが子豚たちのいる場を示す手がかりなのである。これは、ピクシー版に似た、神秘的なものを感じさせる。しかも、ハリエニシダは、通りがかった男が抱えていたのを2匹目の子豚がもらい受けただけで、その男が、どれほど遠方からやってきたかもわからないし、1匹目と3匹目が、どこにいたかもわからない。それでも、ハリエニシダの抱かせるイメージとして、原野の規模の広大さ、風の吹き抜ける空間の広がり、子豚たちは、荒野と一緒にほうりだされたのだと感じさせるのである。

ハリエニシダは、甘い香りでミツバチを惹きつけるが、ミツバチは、古来、蜜と蠟という重要な物質を提供する昆虫であり、そのような「天国の小さな鳥」を引き寄せるハリエニシダは、幸運を引き寄せる、魔女にたいする御守りとされてきたという伝承の意味をもつようだ。しかし、「ハリエニシダの花が咲いていないとき、接吻する者は誰もいない」という諺がある¹⁵⁾。ハリエニシダは年中、咲いているから、接吻は四季いずれの時でも行われているという意味である。子豚たちが拠って立つ場が荒野というだけでなく、物語後半で、収穫の話が出るまでは、季節についても、何も、語られていない空間に、子豚たちはいるのである。

フランス語圏類話にも、ハリエニシダではないが、シダ類が動物たちの家の材料になる話がある。アンリ・プーラの『お話しのお宝』所収の「思慮深い(雌)豚の物語」(“Le conte de la truie bien avisée”) (v.51)¹⁶⁾である。これに、ソースの記載はないが、プーラの生まれ育ったフランス中南部のオーヴェルニュの地名がふんだんに出てくる。ハリウエル版とは対照的に、すべてが、このオーヴェルニュ地方を指し示しているのである。

物語冒頭から、メンドリ (poule)、雌のアヒル (cane) そして雌豚 (truie) たちの出発点となる場所、サンテチェンヌ・スル・ユッソン (Saint-Etienne-sur-Usson) というオーヴェルニュ地方の実名が登場する。謝肉祭に食べられると知って、機織り工 (tisserand) のところから逃げてきた動物たちは、シャンプリエーヴ (Chambeliève) へ逃げ出す。そこで、動物たちが建てる家の素材は、メンドリはヒースの茎 (brin de bruyère)、雌のアヒルはシダ (fougère) とヒトツバエニシダ (genêt) である。そして、雌豚は、モルタル (gâchée en terre) 石造り (pierres) の家を建てる。

しかし、なぜ、シダなどで家を建てることになったかが説明される。「飼い主たちが年をとっているのです、ヒース (brande) ややぶに覆われた土地 (brousse) にまで捜しにこないだろう」と動物たちが考えたからなのである。このように、場所の実名も出して、シダが登場する理由が事細かにプロットとして説明されるのにはたいして、ハリウエル版では、あくまでも、ハリエニシダが登場する理由はわからないままである。また、ハリウエル版では、物語前半では、ハリエニシダの存在のために、かえって季節感まで不在なのにはたいして、このオーヴルニュの話は、謝肉祭が近づいている頃と示されている。

ハリウエルがハリエニシダを登場させているのは、伝承童謡の世界がこれから語られるという幕開きにも似た効果があると思われる。ジェイコブズの「三匹の子豚」は、ハリウエル版「三匹の子豚」のテキスト全文に冒頭に4行詩¹⁷⁾を加えた構成であることにすでに触れたが、ジェイコブズは、ちょうど、冒頭の詩で同じ効果をねらったのではないだろうか。この詩では、「昔々」(Once upon a time)の決まり文句とともに、これから物語る話は、動物たちが人間のよう、詩を口ずさんだり、噛みタバコを噛んだり、嗅ぎタバコを嗅いでいた頃のことだと説明をしている。ジェイコブズは、これを収めた『イギリス昔話集』の巻頭の「序文」(Preface)でも、昔話 (tale) あるいは民話 (folktale) は、かならず「なにか驚くべき驚異を感じさせるもの」(something extraordinary) を含みもっているからこそ、書名に、〈tale〉ではなく、「妖精物語」〈fairy tale〉の語を用いるのだと説明しているのと、同じことであろう。

そして、おそらく、ジェイコブズは、ハリウエルの「三匹の子豚」が醸し出している、どこでもなく、いつでもない空間の魅力に気づいていたに違いない。このような物語の謎の部分、マザー・グースの世界だと思って受け入れる読み方を示唆するために、詩の形式を、物語のはじめに置いたのではないだろうか。実際、論理的におかしい類いの要素も混入しているからだ。オオカミと子豚の間のやりとりでは、豚にはないはずの「あごのひげにかけて」という不合理な決まり文句を、子豚たちはオオカミに対して拒否の返事とともに繰り返している。応答の言葉のみを以下に引用しておく。

“Little pig, little pig, let me come in.”

“No, no, by the hair of my chiny chin chin.”

“Then I’ll puff, and I puff, and I’ll blow your house in.”

—子豚や、子豚、わたしをなかへ入れとくれ。

—いやだ、いやだ、ぼくのちっちゃなあごのおひげにかけて。

—では、はーっとして、ぷーっとして、おまえのおうちを吹き飛ばすぞ。

もっとも、ジェイコブズは、豚にはないはずのあごひげが言及されていることについて、『イギリス昔話集』の巻末の解説で、「オオカミと七匹のコヤギ」と、この「三匹の子豚」との話

を近づけるものと民話学者としての説も提示している。当時は、まだ、民話の話型分類がなされていなかったため、ジェイコブズも曖昧な表現にとどまっているが、今日なら、グリム童話「オオカミと七匹のコヤギ」(KHM5/AT123)がその類話のひとつであるAT123と「三匹の子豚」の話型であるAT124との話型の混交という説明ができるだろう。

フランス語圏類話のなかには、これがよくわかるものがある。プーラの「3匹のメンドリの物語 (“Le conte des trois poulettes”）」(v.50)の物語要素〈III.E(1)1.〉に該当するオオカミによる「追加のペテン策」として見られる。メンドリが灰汁で洗濯しているところに、オオカミがヤギをよそおってやってくる。オオカミは、メンドリに白い手か確認されると言われると、粉屋で手を白くまぶしてまたやって来るというものである。

ハリウェルもまた、『イングランドの伝承童話』の「第5版への序文」で、伝承童話の表現の魅力を以下のように語っている。

[...] and there will be something lost from the imagination of that child, whose parents insist so much on matters of fact, that the “cow” must be made, in compliance with the rules of their educational code, to jump “*under*” instead of “*over* the moon”; while of course the little dog must be considered as “barking,” not “laughing” at the circumstance.

上の引用部で、ハリウェルは具体的な伝承童話を例に説明を行っているが、これは『イングランドの伝承童話』にも収められている〈“Hey! diddle, diddle”〉のことである。これは、以下のようなタイトルのない詩の冒頭であるが、しばしば、伝承童話では、このように冒頭の一行をタイトルがわりとしているものである。

Hey! diddle, diddle,
The cat and the fiddle,
The cow jumped over the moon;
The little dog laugh'd
To see the sport,
While the dish ran after the spoon.

Halliwel, *The Nursery Rhymes of England*, Edition The Bodley Head, 1970, p. 170.

ヘイ、ディドル、ディドル
猫とヴァイオリン、
雌牛が月を飛び越えた。
子犬はそのおもしろい光景を見て
笑った。

そしてお皿はスプーンと逃げた。

夏目康子『マザーグースと絵本の世界』岩崎美術社，1999年，49ページ。

ハリウエルは「序文」の引用部において、〈Hey! diddle, diddle〉の一節に関連して、親たちは、「牛がお月さまを飛び越えて（over）飛ぶ」とあるのは、「お月さまの下を（under）」であるべきだろうし、また、「子犬は笑っている（laughing）」ではなく「吠えている（barking）」であるべきだなどの類いのことに、「学校で教える規範体系を持ち出して（with the rules of their educational code）」こだわりすぎてしまうのであり、そんな親をもつ子どもたちから想像力が失われていくことになるのだろうと語っているのである。ハリウエルは、伝承童謡の内包する不合理さ、ナンセンスこそ子供たちの想像力をかき立てることであり、これが重要なことだと考えているのである。

ところで、上に引用の〈Hey! diddle, diddle〉を、ディズニー・アニメでは、小枝で家を作った子豚が口ずさむのである¹⁸⁾。つまり、ジェイコブズが、物語の序文がわりに付した「豚たちが詩を唄っていたむかしむかしのこと」の光景を、ディズニーは、アニメの歴史上、はじめて、映像と音が完全に同調したトーキー作品で再現してみせたことになるのだから、この作品が人々に与えた衝撃は大きかったことだろう。

ハリウエルの「三匹の子豚」に登場するハリエニシダは、AT124話型の類話としては他に例をみないと述べたが、この再話にきわめて忠実なことで知られるガルドンの絵本¹⁹⁾においてすら、菜園や果樹園の名前、シャンクリンの市、オオカミを子豚が食べる結末までを、そのまま踏襲しても、ハリエニシダは「木の枝」に変えられてしまっているのである。しかし、これまで見てきたように、このハリエニシダこそ、ハリウエルにとっては伝承童謡の世界への扉を開く謎の存在であったのだと理解されるのである。

ところが、巧妙に、言葉を選んだハリウエルのテキストだが、「三匹の子豚」の再話は、次第に、英語圏では、彼が予想もできなかった方向をめざさせることになる。

iii) 家を出る理由と教訓性

フランス語圏51類話について、動物たちが住み慣れた地を離れる理由としては、物語要素〈I.B.1, 2.〉に該当するが、「屠殺される」「売られてしまう」というのが、圧倒的に多い。51類話中23話（v.1, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 23, 29, 31, 32, 33, 34, 42, 43, 45, 48, 50, 51）に及ぶ。そして、そのうち、4話（v.1, 17, 45, 50）を除いて、動物たちが異種複数であるのも特徴である。だからこそ、そのうちの一匹が耳にすることになった屠殺の情報を、他の仲間たちに知らせてまわるという物語要素〈I.B.4.〉と連動することになる。

一方、ハリウエル版では、すでに言及したように、困窮により、母豚に促されて子豚たちが家を出るというものだが、これはドラリュのAT124話型の物語要素分析の項目に見当たらない

い。実際、フランス語圏類話には認められない物語要素である。しかし、フランス語圏類話のなかには、ハリウェルの再話の直接的あるいは間接的な書承の影響を受けたものも混じっているはずである。しかも、収集されたフランス語圏類話51話中、18話が19世紀の再話である以外は、ハリウェルの再話から優に50年、1世紀たったの再話が大半であるにもかかわらず、ハリウェルの影響が見られないということは、ハリウェルが設定した子豚たちの出発理由の特殊性が際だっていることになるだろう。

参照した英語圏類話では、ハリウェルの「しあわせをさがしに」という表現が黒人伝承（リップニコット版）に見られるだけである。下に引用部の太字のフォントで示した部分である。

[...] and as she had not enough to keep them, she sent them out **to seek their fortune**.

Nursery Rhymes of England (Halliwell)

母豚は小豚たちに十分食べさせてやれなくて、自分たちでしあわせをさがすようにと、送り出したのだった。

A family of seven pigs leave home **to seek their fortune**, and settle in a neighborhood harassed by a mischievous fox. Each of these pigs builds himself a house [...]

Lippincott's Magazine of Popular Literature and Science (W. Owens)

7匹の豚たち家族は、しあわせをさがそうと家を離れ、付近に落ち着くが、そこはキツネが悪さをするところだった。豚たちはめいめいに家を建てるが [略]

しかし、リップニコット版、つまり、黒人伝承では、ハリウェル版のように、子豚たちは母親から送り出されたわけではなく、自分たちの意志で世のなかに出て行ったわけで、「困窮」にはいっさい言及がない。これ以外の英語圏類話では、そもそも、住み慣れたところを離れるというモチーフそのものが欠けている。それにもかかわらず、動物たちが家を建てる動機とは、ラング版でも、クンダル版でも、宿敵であるキツネに対抗できる家を建てるようにと母親が子どもたちに遺言するというものである。そして、そこから、この物語は、堅固な家を建てるのが、親の言いつけを守ったかどうかというモラルと連動することになるのである。では、ハリウェルの再話にそのようなテーマを誘導するような萌芽が見られたらどうか。

The first that went off met a man with a bundle of straw, and said to him, "Please, man, give me that straw to build me a house"; which the man did, [...] The second little pig met a man with a bundle of furze, [...] The third little pig met a man with a load of bricks, [...]

Nursery Rhymes of England (Halliwell)

最初に出かけた子豚は、藁の束をかかえた男に会い、彼に「ねえ、おじさん、わたし

の家を作るのにその藁をくださいな」と言ったところ、そうしてくれました。〔中略〕2番目の子豚はハリエニシダの束をかかえた男に出会った〔中略〕3番目の子豚は、煉瓦の荷を担いだ男に出会った〔略〕

上の引用部分で明らかなように、ハリウェル版で語られる子豚たちは、きょうだいの長幼にかかわらず、ただ、家を出た順番にしたがって、3種の家の素材、藁、ハリエニシダ、煉瓦が振り分けられている。したがって、どの材料を得たかは、個々の子豚たちの資質とも、長幼とも無関係であり、偶然となる。当然、建てた家が破壊されたかどうかの結末と個々の子豚との因果関係も成立しないはずである。しかし、物語冒頭に、困窮が親のもとを去る理由だと語られることは、家をかまえることは親からの自立であり、そして、破壊されない家を建てることは、社会的成功をあらわすものであると関連づけられかねないものをはらんでいる。ハリウェルは、英語圏類話において、AT124話型の口承話を教訓物語に仕立てる道筋を引いたのかもしれないのだ。英語圏類話を古いものから検討してみよう。

ピクシー版（1853）は、ピクシーとこれを襲うキツネとの物語だが、ピクシーはイングランド由来の伝承の小妖精であり、そもそも動物界の弱肉強食の力関係が両者の間に寓話的にすら想像できないものである。さらには、家の素材とそれをキツネが破壊できるのかという相関性も、何ら、現実のキツネの属性と物質の現実の強度とは関係ない次元のこのように描かれる。なぜなら、木はまだしも、石の家も、キツネは破壊できるからである。そして、キツネは鉄の家にだけは入れないのも、ここから、物語要素〈III.〉の「追加のペテン策」への移行のための便宜上のキツネの属性と受けとめられる。

しかし、結末は、あっけないものである。たまたまピクシーの家の戸が開いていたので、入りこんだキツネが寝ていたピクシーを箱に閉じ込める。しかし、ピクシーの、すばらしい秘密を教えるからとの言葉にのってしまったキツネがふたをあけるや、ピクシーのかけた魔法でキツネは自ら箱に入り、そこで死んでしまうというものである。イングランド南西部の広大な原野であるダートムア伝承というにふさわしい、幻想的ですがある話で、現実的な教訓などありえないであろう。

ところが、この書から程なく出たクンダル版（1856）では、母親が登場し、子どもとの関係が濃密に描かれる。死に瀕した母ガチョウが3羽の娘ガチョウにキツネから守れる家を作るようにと、家の素材は石かレンガ、屋根の仕様はモルタル張りと仔細に家について指示した遺言を残すのだが、それを忠実に守ったのが長姉だけというものである。しかも、物語の最後に、「教訓」（moral）がおかれている。

Moral

Mankind have an enemy whom they well know,

Who tempts them in every way;
 But they, too, at length shall o'ercome this foe,
 If wisdom's right law they obey.

Cundall (XI, p. 16.)²⁰⁾

教訓

人間には敵がいる。
 よく知っているこの相手は、あらゆる手でしかけてくる。
 でも、ついには、敵に打ち勝つことができる。
 分別のもたらす正しい教えに従うならば。

黒人伝承 (1877) では、クンダル版の「教訓」の追求がさらに続くことになる。7匹の豚が家を出るが、親は登場せず、ハリウェル版とちがって、親はこどもたちがしあわせをみつけに家を出たことにまったく関与しない。また、この7匹の豚 (a family of seven pigs) はきょうだいである。6匹が、泥の家を作ったのにたいして、「きょうだいで一番ちっちゃい豚」(runt) について、「子豚くん」(Tiny Pig) の表現があるが、〈runt〉は、同じ親から生まれたなかで一番小さい豚をさすからである。そして、この子豚くんが、この物語のヒーローだと説明される。これは、ちょうど、「親指小僧」とおなじ役割があたえられたものであろう。

泥の家をつくった6匹の豚たちは、すべてキツネに食べられてしまうが、石の素材で、しっかりした戸に煙突をそなえた家を建てた子豚くんの家はもちこたえ、キツネが煙突から降りてきたところを、火のついた藁を投げつけて焼き殺してしまう。そして、「ご近所のヒーロー」として、以降、平和に過ごしたというものである。

そして、最後に、語り手は、この物語が教訓物語となりうることを示唆するのである。

This story certainly furnishes foundation for a moral which we will leave the reader to construct for himself. *Lippincott's Magazine of Popular Literature and Science* (negro tale)

この物語はあきらかに教訓となるべきものを与えてくれるが、それは読者自身で考えてもらいたい。

ラング版 (1892) の物語は、クンダル版と同様に始まる。母親が最期が近いと悟って、子どもたちめいめいが望む家を建ててやるというものだ。ところが、子豚の選んだ家の素材は、それを選んだ子豚の性格にふさわしいかのように関連づけられている。泥の家の子豚は、泥のなかで転げ回るのを好む「悪い習慣」(bad habits) をもっていて「きたない」(dirty)。キャベツの家の子豚は「食いしん坊」(greedy) である。そして、「〈dirty〉でも〈greedy〉でもない」「しっかりしている」(〈good〉/〈nice〉/〈nice dainty ways〉) と形容される子豚は煉瓦の家で、

ドアには門をしてあるので、キツネは中に入れない。

ここでは、キツネに破壊されるような素材を選んだ事が、性格や生活習慣の弱点と明確に結びついているのである。一方、性格の良さが、豚の皮膚のなめらかさなど外見的にも見えるかのように表現されているほどである。

このように見てくると、ハリウエル版において、親からの別れ、困窮の要素が提示されても、物語のなかでは、具体的にはなんら示唆することのなかった教訓が、英語圏類話においては、さらに明確にわかるようにと、あたかも、再話において、追求され続けたかのように思われる。

では、フランス語圏類話には、なにか共通して、しかも、ヴァリエーションをもって繰り返される傾向のようなものはあるだろうか。

iv) 家の素材の選択と論理性

国民性が民話にも反映すると、評論家ポール・アザールは述べている。。そして、そもそも、フランス人が「論理」(logique) というものに情熱をもっていることは誰しも語ってきたことではないかと述べたうえで、ペロー童話に描かれる仙女たちが「デカルト的仙女」(des fées cartésiennes) であることを例として挙げている²¹⁾。しかし、国民性としての論理への情熱は、作家による再話だけでなく、口承の段階においても発揮されるようである。

ところで、フランス民話の特徴を検討する際に対象とできる条件について、ドラリュは『フランスの民話』の序文において言及している。「リュゼルやセビヨ以来、誠実な民俗学者や研究者により受け継がれてきた慣習に従って、ソースを、すなわち、採話(収集)を行った年月日に、語り手の名前、出身地、年齢、それに刊行物からの借用の場合は正確な原典を記載した」²²⁾ 民話集であるべきだと指摘する。この意味では、民話学者であるドラリュがソースを明確にして収集したニヴェルネ民話「オオカミと豚とアヒルとガチョウ (“Le loup, le cochon, la cane et l'oie”）」(v.8)²³⁾ ほど、フランス民話の特徴を検討するのにふさわしいものはないだろう。

この話では、住み慣れた農家を離れた動物たちが家を建てる順番にまず注目しよう。ハリウエル版では、3匹の子豚たちはきょうだいではあるが、最初に家を出た子豚から3匹目までについて、長幼の区別も、家を出た順番に関与する事情の説明もない。そして、三者それぞれに家の素材を、重複することなく振り当てている。このような偶然性のために、家の運命とその家の主とのいっさいの因果関係が排除されていた。

しかし、レンガの家の子豚は、格別な属性もしくは資質があるとも表現されないがままに、物語要素〈III.〉にあたるオオカミによる「追加のペテン策」にたいしては、オオカミの裏をかくような智恵者ぶりを示すことになる。物語要素〈II. A (1)〉にも、3番目の動物の家がもっとも堅固だとあるように、昔話においては、3番目が成功をおさめるものだというおきまりの原則をみるべきであろうか。

一方、ドラリュのこのニヴェルネ民話 (v.8) は、この問題をみごとに解決しているのでは

る。つまり、昔話の原則ではなく、論理による説明が可能である。主人公の動物たちが、同種複数ではなく、異種複数であることの理由がよく理解されるのである。つまり、三匹の異なる種の動物がどのような家の素材を選んだかが、動物の種の特徴に見合った結果となっている。屠殺されると知って、三匹、同時に逃げ出したが、家を建てる順番は、疲れて歩けなくなった順番であり、動けなくなったところに家を建てるのである。それは、体が小さく、体力のないものの順になるはずだ。つまり、まず家禽である（雌の）アヒル（la cane）、次にこれより大きい（雌の）ガチョウ（l'oie）、最後に豚（le cochon）となるのである。この場合、実際にこのような動物の大きさを経験的に知っていて、差別化して認識できるような環境の中で語り継がれてきたことになるだろう。つまり、農村でこそ生まれた話だということになるだろう。

また、家を建てる材料を運ぶためには、これがその動物の大きさ、体力に相応のものであることが必要である。したがって、アヒルはワラ（paille）、細い枝（brindilles）、木の葉（feuilles）であるが、もう少し大きいガチョウでは、木の枝（branches）となって、同じ「枝」でも、選択において差別化がなされている。しかし、いずれも、家禽の「家」にあたる語には家畜小屋を意味する〈cabane〉が用いられている。そして、3匹のうち、格段に力のある種に属する動物である豚の「家」は、壁が大きな石（des grosses pierres）でできていて、その上に板（planches）を釘で打ち付けてあり、さらには、屋根には釘が上向きに刺さっているほどのものなので、人間の家を指す〈maison〉の語が用いられている。また、三者は、異なる材料の家であるが、一様に木を家の素材として用いながら、使用する木材の規模は、〈brindille-branche-planche〉と面が広くなり、〈アヒル-ガチョウ-豚〉のそれぞれの体格との対応もなされている。

このニヴェルネ民話においては、家の素材の選択が、三者の動物界での種としての自然の序列に添ったものとなっているために、素材の選択と素材の選択がもたらした結果との間に、現実的なモラルが持ち込まれえないのである。また、豚に与えられた格段に堅固な素材とその慎重さは、他の家禽たちを救うために活かされるので、黒人伝承での子豚くんのヒーローぶりは事情も異なる。自分のきょうだいを救えなかったが、キツネを退治したあとで「近所のヒーロー」となる「子豚くん」とは違い、この豚はともに家を建てようとした仲間を救うための「ヒーロー」となるのである。

ただし、話によっては、登場する動物どうしの大きさなどの優位順が、このように見事に論理的には判断がつかないように見えるものもありそうである。先にとりあげた、やはり、ソースの明確なアリエージュ地方の民話「メンドリと（雄の）アヒルと（雌の）ガチョウ（“La poule, le canard et l'oie”）」（v.44）を見てみよう。

ここでは、登場する3羽の家禽たちは異種複数であるが、性別も異なっており、体格、体力の優位順の決定がむずかしいはずである。3羽と一緒に山頂をめざした旅に出発するのだが、やはり、疲れた順番に、そこに小さな小屋を作り、残りの動物はさらに山頂に向かって歩を進

める。最初に（雌の）ガチョウ（oie）、次に（雄の）アヒル（canard）、そしてメンドリ（poule）の順に疲れて、それぞれに小屋（cabanne）を建てるのだが、素材は三者とも、一様に、「細い枝」（brouquillettes : brindilles の方言）なのである。つまり、これらの家禽に体格的な顕著な差はないという合理的判断の反映とみなされる。また、それぞれが建てる家は、さきほどのニヴェルネ民話の家禽たちの家をさした「小屋」（cabane）に指小辞のついた〈cabanette〉の語となっている。

さきほどのニヴェルネ民話も、このアリエージュ民話も、〈II. B (1) 1, 2.〉の物語要素をもち、オオカミは体を暖めたいとの口実でそれぞれの家に入り込むが、アリエージュ民話では、すでに紹介したように、家禽たちの側から「強く屁ってみろ」とオオカミを挑発する言葉を放つのである。ところが、この挑発に応じたオオカミが、ハリウエルのオオカミが「は一っとしてぶ一っとして吹いた」ように、「放屁して放屁して」（il s'est mis à pêter et à loufer）をやり始めたので、家はあえなく破壊され、家禽は家の外に放り出されることになる。ところが、オオカミは、そのあと、外に放り出された動物にはかまわず、さらに、山頂をめざすのである。こうして、3羽目となるメンドリも同様の経緯で、小屋の外に投げ出されるが、オオカミはそれ以上なにもせず立ち去ってしまう。そこで、困ったメンドリは山を下り、次々と同じく小屋を失ったアヒル、ガチョウと再会し、涙を流しあい、村と一緒に戻ることに決め、ずっと農場で暮らしたというフランス語圏類話中、唯一、物語要素〈IV.〉を持つ話である。

この物語では、動物三者の端的な差別化ができないことが、そのまま、同じ結果につながるという論理性が認められる。しかし、本来の弱肉強食の序列を無視して、弱者の側から強者であるオオカミを、しかも、スカトロジックな意味で挑発していることによって、ニヴェルネ民話に見たような動物界の種に基づく現実的な差別化はなされていない。なにより、登場する動物たち自身が、そのような規範が存在しないかのように、オオカミと一緒に暖をとるし、オオカミも、挑発にのって放屁して、家を破壊しても、動物には手を出さない。あたかも、オオカミが枝の小さな小屋を自分の屁で吹き飛ばせるかを、三度も試したかっただけであるかのようなナンセンスな楽しい民話となっている。

現実の家の素材ではなく、呪文のように家の素材を唱える回数が、建てる家の大きさに比例する数量的論理性を示す口承話すらある。マスティニョンによるヴァンデ地方の民話「オオカミと子豚（“Le loup et le goret”）」（v.26）²⁴）である。ヴァンデ地方の78才の女性によって、1950年に語られたとソースが付記されている。夫婦が森に住むことにし、引き連れてきた動物たち、メンドリ（poule）、雌のアヒル（cane）、そして子豚（goret）のために、空き地に次々と家を建ててやり、最後に自分たち夫婦の家を建てる。

この話については、動物たちの間に、現実的な体格の区別を考えてみる楽しみから、完全に目が逸らされてしまうだろう。なぜなら、これは、魔法の世界のお話だと明らかに語っているからだ。家のための素材も謎のまま、家を建てるために「3本の棒切れと3本のフォーク（熊

手)で」と唱える呪文は、あたかも、それらを並べて家の形にしたかのようである。

Bâtis, bâtis, ma petite logette

*A trois bâtons, à trois fourchettes!*²⁵⁾

できろ、できろ、わたしのちっちゃなおうち

3本の棒切れと、3本のちっちゃなフォーク(熊手)で

男が家を建てるために唱える呪文の句は、上に引用したのが、メンドリの家を建ててやるのに必要だった1セットにあたり、雌のアヒルには2セット、子豚には3セット、そして夫婦の家には4セット、繰り返すだけでよいのである。これは、家の主の大きさに見合って、魔法の呪文を唱える回数が設定されていると理解されるだろう。そして、この話でも、オオカミが家をこわすのは、先に挙げたアリエージュ民話同様に、放屁によるものとなっている。魔法表現に、放屁による家の破壊という滑稽な動物話である。

ところが、やってきたオオカミは、メンドリとアヒルについては、呪文をくりかえした回数が1度であろうと2度であろうと、家に小さな穴をあけて、なかの動物を確かめると、放屁してドアを蹴破って入ると食べてしまうのである。これは、先に挙げたアリエージュ民話と同様に、メンドリとアヒルは、同じ家禽としてしか認められず、両者に差はなく、したがって、必要とした呪文の回数が違って、オオカミにとって両者に差はないものとして描かれているかのようである。一方、哺乳動物の子豚は、家禽とは違うものとして区別され、その家はオオカミの放屁に耐えるのである。そして、子豚は、物語要素〈III.〉にあたる、オオカミによるペテン策に対決することになる。

以上、動物による家の素材の選択と動物の負う結果との関係を中心に、いくつかのフランス語圏口承版の類話を参照したが、作家による文学的な再話でなくとも、語りを紡ぐ過程ですべりこませている人々の論理的思考が、フランス口承民話の特徴づけているのが理解されるだろう。しかも、時に、魔法やスカトロジックな要素すら混入させ、教訓話からは遠いところに連れていこうとするかのようである。これこそ、長きにわたり、フランスでAT124話型の動物民話が口承で愛され続けてきた所以であろう。

註

引用文中、訳者の明記のないものは、拙訳である。また、ハリウェルとジェイコブズの“The story of the three little pigs”については、フランス民話学者ドラリュが“The Three Little Pigs”として『フランスの民話』で紹介し、さらに、“Les Trois Petits Cochons”と仏訳しているように、一般的慣例にしたがって「三匹の子豚」と訳している。

- 1) 昔話の学術的分類には、アールネとトンプソンが作成した話型カタログ『民話の話型』(*The types of the folktale, A Classification and Bibliography, Antti Aarne's Verzeichnis der Märchentypen, Translated and*

Enlarged by Stith Thompson, Indian University, 1961) が世界的に使用されている。これは、AT番号（話型番号）ごとに、その話型の代表的な物語名が掲げられ、特筆すべき類話（同じ話型の異話）の出版、その話型を構成する主な昔話のモチーフが挙げられたものである。さらに、数字だけとは言え、地域あるいは国別での類話収集数も記載されており、該当話型の類話の世界における分布状況を知るのに参考になる。

- 2) 『フランスの民話—フランスの類話についての考察付きカタログ』（Paul Delarue et M.-L. Tenèze, *Le Conte Populaire Français, Catalogue Raisonné des versions de France*, Maisonneuves & Larose, Édition en un seul volume reprenant les quatre tomes, Tome Troisième, 1976, p. 393.

1957年以降は、ドラリュの弟子であるトゥネーズ (Marie-Louise Tenèze, 1922-) によってカタログの作成が継続され、順次、出版された。1976年から1985年にかけて出版された4巻が、1997年に一冊にまとめて出版された。

『民話の話型』によれば、AT124話型の類話分布は、最も多いフランスにおいて47話で、次が、フランス系アメリカ地域 (Franco-American) の11話となっているので、たしかに、フランス語圏での類話の多さが突出しており、ドラリュの『フランスの民話』での指摘と関連づけられることになるだろう。

- 3) 全51類話の再話（出版）年度一覧（一部省略表記のまま）
1. E. Edmont, *Contes du pays de Saint-Po dans Revue des traditions populaires* 18, 1903.
 2. BIRETTE, Abbé Charles, *Dialectes et légendes du Val de Saire*, 1927.
 3. “Le Loup, le Renard, le Coq et la Poule”, recueilli par A. Meyrac à Francheval, IN *Traditions, coutumes, légendes et contes des Ardennes*, Charlesville, 1890, pp. 460–462.
 4. Emmanuel Cosquin, *Contes populaires de Lorraine*, Paris, 1886.
 5. *Contes populaires recueillis à Bournois* (canton de l’Isle-sur-le-Doubs, arrondissement de Beaume-les-Dames) by Roussey, Charles; Société des parlers de France Published 1894.
 6. Barbizier, 1950.
 7. Gauthier-Lafond, *Contes de Grand-mère*, Nathan, 1935.
 8. Paul Delarue, “Le loup, le cochon, la cane et l’oie”, recueilli par Paul Delarue auprès de Marie Gaudichet, née à Lutbenay(Nièvre) en 1902, IN *L’Amour des Trois Oranges et atures contes folkloriques des Provinces de France*, Éditions Hier et Aujourd’hui, 1947.
 9. Millien-Delarue, *Contes du Nivernais et du Morvan*, 1953.
 - 10.–16. Ms. Millien-Delarue, *Contes du Nivernais recueillis par Achille Millien de 1885 à 1890*. 約920話のなかから、ごく少数が、いくつかにかけて出版されたものの一部。
 17. *Revue du Nivernais* 2, 1897.
 18. Henry Cormeau, *Terroirs Mauges, miettes d’une Vie provinciale*, Paris: Georges Crès, Impression d’amateur Henry Cormeau à Seiches, 1912.
 19. *Revue des traditions populaires* 23, 1908.
 20. Cadic, *Bretagne II*, 1919.
 21. “Les Trois petites poules”, conté en 1880 par Joseph Macé, de Saint-Cast, mousse, âgé de 15 ans environ, recueilli par Paul Sébillot IN *Contes populaires de la Haute-Bretagne II*, G. Charpentier, Editeur, 1881, pp. 325–330.
 22. *Revue des traditions populaires II*, 1896.
 23. Pineau, *Poitou*, 1891.
 24. Pineau, *FL. Poitou*, 1892.
 25. Ms. A de Felice, *Enquêtes sur les traditions orales du Bas-Poitou*, 1942-43-45.
 26. Massignon, *Ouest*, numéro 22, 1954.
 - 27–28. Ms. Massignon, *Ouest*, 1950–1952.
 29. *Ibid.*, 1954–59.
 30. *Arts et traditions populaires*, 1953.
 31. *Bulletin de la Société d’études folkloriques du Centre-Ouest I*, 1962.

32. Mir, *Vieilles choses d'Angoumois*. Comptes rendus de P. Delarue, 1947.
33. Ms. Marc Leproux (1898–1973), *Du berceau à la Tombe. Préface de Louis Cros. Contributions au Folklore Charentais. Angoumois, Aunis, Saintonge*. PUF. Paris. 1959 Ms. としては不明。
34. Ibid.
35. Duchon, *Contes populaires du Bourbonnais*, 1945.
36. Ms. V. Smith, *Velay et Forez*, 1924.
37. Ms. Tenèze, ATP 65.26. 311. *Récits et contes populaires d'Auvergne/1 recueillis par Marie-Louise Tenèze dans le pays d'Aubrac*. Paris, Gallimard, 1978. Coll. Récits et contes populaires. Ms. (原稿が記録された年度) としては不明。
38. Ibid., ATP 65.26.269.
39. Ibid., ATP 65.26.110.
40. *Lo Cobreto*, 1928.
41. Seignolle, “Le coq la poule et le cochon”, conté par la grand-mère de Geneviève Martin de Saint-Martin- de-Gurson, âgée de 75ans, recueilli par Claude Seignolle dans *Contes populaires de Guyennes II*, Maisonneuve, Paris, 1946.
42. Bladé, *Contes populaires de la Gascogne*, vol III, 1886.
43. Ms. Perbosc-Cezerac, n° 12 *Contes languedociens et gasons reueillis par A.P rassemblées comparés avec les variations connues dans les pays de langue d'oc par S.C.*
Comptes rendus de P. Delarue, 1949.
44. “La poule, le canard et l’oie”, conté en 1953, par Marie Rouzaud (71 ans, ancienne cultivatrice, Montgailhard, reueilli par Charles Joisten IN *Contes Populaires de l’Ariège*, Éditions G.-P. Maisonneuve et Larose, 1965, pp. 133–135. IN *Folklore* 81, 1955.
45. Maugard, *Contes des Pyrénées*, 1955.
46. *Revue des langues romanes*, 31, 1887.
47. Ibid., 42, 1899.
48. “Le loup, le cochon, la cane et l’oie”, recueilli à Saint-Maurice en 1952, IN *Contes populaires de Dauphiné, Tome II*, par Charles Joisten, Publications du Musée dauphinois, 1971.
- 49–51. Henri Pourrat, “Le conte des trois oisonnes”, “Le conte des trois poulettes”, et “le conte de la truie bien avisée”, dans *Le Trésor des Contes*, 1948–51.
- 4) “The Story of the Three Little Pigs”, IN *English Fairy Tales*, by Joseph Jacobs, IndyPublish. com, 2003, pp. 46–49.
- 5) “The Story of the Three Little Pigs” IN *The Nursery Rhymes of England*, collected by James Orchard Halliwell, The Bodley Head, pp. 29–31. (first published 1970)
- 6) <http://www.pitt.edu/~dash/folktexts2.html#t> (Folklore and Mythology Electronic Texts, page 2, edited and/or translated by D. L. Ashliman)
Three Little Pigs. Folktales of type 124. <http://www.pitt.edu/~dash/type0124.html>
1. “The Story of the Three Little Pigs” (England). Jacobs, 1890.
 2. “The Three Little Pigs” (England). Andrew Lang, *The Green Fairy Book*, 1892.
 3. “The Fox and the Pixies” (England). *English Forests and Forest Trees: Historical, Legendary, and Descriptive* (London: Ingram, Cooke, and Company, 1853), pp. 189–90. [https://archive.org/details/englishforests00unkngoog/engishforests00unkngoog](https://archive.org/details/englishforests00unkngoog/engishforests00unkngoog/engishforests00unkngoog) GoogleBook
 4. “The Fox and the Geese” (England). *A Treasury of Pleasure Books for Young People*, edited by J. Cundall (London: Sampson, Low, and Son, 1856), no. 11. Each story in this collection is paginated separately.
 5. “The Awful Fate of Mr. Wolf” (African-American, Joel Chandler Harris). •Source: Joel Chandler Harris, *Uncle Remus: His Songs and His Sayings* (New York: McKinlay, Stone, and Mackenzie, 1908).
 6. “The Story of the Pigs” (African-American, Joel Chandler Harris). •Source: Joel Chandler Harris, *Nights with Uncle Remus: Myths and Legends of the Old Plantation* (Boston and New York: Houghton, Mifflin, and Company, 1883).

7. “How Come the Pigs Can See the Wind” (North Carolina, USA) •Source: Emma M. Backus, “Animal Tales from North Carolina,” *The Journal of American Folklore*, vol. 11, no. 43 (October–December, 1898).
8. “Little Pig and Wolf” (Virginia, USA) •Source: A. M. Bacon and E. C. Parsons, “Folk-Lore from Elizabeth City County, Virginia,” *The Journal of American Folklore*, vol. 35, no. 137 (July–September, 1922).
9. The Three Goslings (Italy). •Source: Thomas Frederick Crane, *Italian Popular Tales* (London: Macmillan and Company, 1885).
- 以上のうち、1. はジェイコブズ版、9. はイタリア民話、5. 7. 8. は年代的に、ジェイコブズの再話以降のものである。2. のラングは、ジェイコブズ版より2年あとだが、ディズニー・アニメの原作として知られる。
- 7) <https://archive.org/details/englishforests00unkngoog>
GoogleBook
- 8) cf. Catherine Rager, *Dictionnaire des Fées et du Peuple Invisible dans l'Occident Païen*, BREPOLIS, 2003, p. 774.
- 9) “The Fox and the Geese”, XI, IN *A Treasury of Pleasure Books for Young People*, edited by J. Cundall, 1818–1895, HardPress Publishing.
- 10) http://www.gutenberg.org/ebooks/37946?msg=welcome_stranger#FOLK-LORE_OF_THE_SOUTHERN_NEGROES (Project Gutenberg)
Lippincott's Magazine of Popular Literature and Science, Volume 20. December, 1877. “Tiny Pig” by William Owens, pp. 753–755. 黒人伝承としては、アシュリマンの挙げた類話（註6）6.）より古いものである。
- 11) ニール・ゲイブラー『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』中谷和男訳、ダイヤモンド社、2007年、192 ページ。「アンドリュウ・ラングの『緑の童話集』から想をえた」と述べており、他の再話は挙げていない。
- 12) “The Three Little Pigs”, IN *The Green Fairy Book*, edited by Andrew Lang, Hesperus Press Limited, 2014 (first published 1893), pp. 101–106.
- 13) *Le Conte Populaire Français*, Tome Troisième, 1976, pp. 386–393.
AT124 話型の類話および、この話型についての解説は、この第3巻（Tome Troisième）に収められている。第3巻は、動物昔話（les contes d’animaux）にあたる話型番号AT1-299に該当する巻にあたり、トゥネーズが監修を行っているが、すでに見た通り、ドラリュの研究成果を踏襲したものである。
- 14) (v. 44) Charles Joisten, *Contes Populaires de l'Ariège*, Éditions G.-P.Maisonneuve Et LaRose, 1965, pp. 133–135.
- 15) アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』山下圭一郎他訳、大修館書店、1999年。〈furze〉と〈bee〉の項参照。
- 16) (v. 51) “Le conte de la truie bien avisée”, dans *Le Trésor des Contes*, tome 2, par Henri Pourrat, Omnibus, 2009, pp. 1233–1239.
- 17) Once upon a time when pigs spoke rhyme
And monkeys chewed tobacco,
And hens took snuff to make them tough,
And ducks went quack, quack, quack, O!
昔々豚がまだ詩をうたい
猿たちもまだタバコを噛み
牝鶏も嗅ぎタバコを嗅いで元気一杯
あひるだけがグワワ、グワワ
とやっていたむかしむかしのこと
(『イギリス昔話集』河野一郎訳、岩波文庫、117 ページ。)

- 18) I built my house of sticks 僕のおうちは木でできているよ
 I built my house of twigs さあバイオリン弾いて
 With a *hey diddle-diddle* 楽しく踊りを踊ろう
 I play on my fiddle
 And dance all kinds of jigs
 英和文とも、筆者がディズニー・アニメのDVDから書きおこしたものである。
- 19) Paul Galdone, *The Three Little Pigs*, HMH Books for Young Readers; Reprint, 1984.
 ポール・ガルドン『三びきのこぶた』晴海耕平訳、ポール・ガルドン絵、童話館出版、1994年。
 Paul Galdone, *Les Trois Petits Cochons*, traduit par Félix Cornec, Circonflexe, 2006.
 ガルドン(1914–1986)は、児童文学の作家でありイラストレーターとしても知られる。ガルドンの『三匹の子豚』は、1970年の作品である。彼の童話は、しばしば、〈l'histoire classique〉と呼ばれるように、もとの再話に忠実な正統派タイプの絵本であることが特徴である。
- 20) Cundallのリプリント本も、ページは、各チャプターごとで、いわゆる通し番号のページ数はない。
- 21) Paul Hazard, *Les livres, les enfants et les hommes*, Ernest Flammarion, 1932, p. 191. ペロー童話の論理性については拙論参照(『京都産業大学論集』人文科学系列第32号)。
- 22) Paul Delarue, *Le Conte Populaire Français*, Tome Premier, p. 35.
- 23) (v. 8) “Le loup, le Cochon, La Cane et l’Oie”, dans *L’Amour des Trois Oranges*, Éditions Hier et Aujourd’hui, 1947, pp. 203–207.
- 24) (v. 26) Geneviève Massignon, “Le loup et le goret”, dans *Contes de l’Ouest, Brière-Vendé-Angoumois*, Éditions Érasme, 1953, pp. 187–191. Conté en 1950 par M^{me} Veuve Honoré Gibault, 78ans, L’Ile d’Elle (Vendée).
- 25) *Ibid.*, p. 187.

A Cultural Reading of Halliwell's “The Story of the Three Little Pigs” (AT124) and its French and English variants

Keiko TOKURA

Contents

〈part 1〉

1. “The Story of the Three Little Pigs” comes from the traditional oral folktale classified as the folktale type AT124. Since this tale is well-known as the work of J. O. Halliwell's (or by the work of J. Jacobs, who included the whole text of Halliwell's in his book), people may think that it was originally an English tale. But it is already pointed out by the well-known French folklorist Paul Delarue that this tale has been told as a nursery tale in France for a long time, though it gained world popularity through the English speaking countries owing to Halliwell and Walt Disney.

2. The analysis of the elements of this type of folktale (AT124) specifies the difference of the characteristic in the French variants and the English variants. In the English variants, it is the “morality” that matters, and in the French variants, “logic” is pursued.

〈part 2〉

3. Several details such as 〈turnip〉, 〈apple〉 and 〈butter-churn〉 seen in Halliwell's version refer to the “Halloween culture” which was to fade out in England in his time.

4. To the French people, the “turnip” is just a typical vegetable for the lower class. In England, the turnip was the symbol of the social change, due to the agricultural and industrial revolution.

5. The “furze” used as the material to build the second pig's house should be regarded as the only factor that reveals in what kind of environment this pig is to live. This type of metaphor using the motif of the “furze” is what is often seen in the 19th century English literature. The key word for the 19th literature such as Hugo and Dickens's which describes the adversity of the children, is 〈misery〉, and this key word may be applied to the comprehension of “The Story of the Three Little Pigs” as well.

Keywords: furze, turnip, apple, butter-churn, misery